

2024年情報文化学会九州支部大会

日時：2024年2月10日（土）12:50～

会場：オンライン開催（Zoomを使用）

1. 開会挨拶・オンライン開催に伴う諸注意（12:50 - 12:55）

支部長 飯村伊智郎（熊県大）

2. 研究発表（13:00 - 14:15）

1件あたりの目安：講演10分、質疑4分、交代1分

■セッションA（13:00 - 14:15）

座長：武田和大（鹿児島高専）

OP-A1 観光DXによる行動変容の可能性と課題

○大嶋淳俊（宮城大）

OP-A2 発話行為を伴う知覚反応テストを通じた言語報告の考察

○山田雅敏（常葉大）・高田亮介（東大院）

OP-A3 府省等におけるSNS運用方針の現状と課題

○本田正美（関東学院大）

OP-A4 2D平面内における自己回避型エージェントによる探索

○大澤智興（九工大）

OP-A5 擬死行動を取り入れた社会性クモ最適化アルゴリズムの提案

○海老原誠一郎・森山賀文（熊県大）

3. 閉会挨拶

情報文化学会九州支部副支部長 武田和大（鹿児島高専）

連絡先：熊本県立大学 総合管理学部 総合管理学科（情報部門） 飯村伊智郎 (iimura@pu-kumamoto.ac.jp)

研究発表の概要（200 字程度）

■セッション A（13:00 – 14:15）

座長：武田和大（鹿児島高専）

OP-A1 観光 DX による行動変容の可能性と課題

新型コロナの影響を受けて、観光交流活動は大きなパラダイムシフトに直面している。コロナ禍では訪問観光ができないために急激にオンラインツアーなどの観光 DX が大いに注目され、今後は観光 DX が進むと予想された。ところが、2023 年 5 月に新型コロナが 5 類に移行して人々の移動が自由になると、国内外からの観光客が急増し、人手不足などから対面対応に追われて、観光 DX の経験が有効活用されているとはいえない。本研究では、このような動向把握を踏まえて、質問紙調査や関係者への聞き取り調査から、その要因や今後の展望について考察した。

OP-A2 発話行為を伴う知覚反応テストを通じた言語報告の考察

本発表は、発話行為が動作に与える影響を明らかにするために、赤丸・青丸どちらが表示されても「はい」と発話する場合をコントロールタスク、赤丸が表示された場合には「あか」、青丸が表示されたときには「あお」と発話する場合をターゲットタスクに設計した知覚反応テストを実施し、実験後に収集した言語報告について質的分析手法 SCAT の定性的分析を行った。その結果、言語報告は 7 つに分類され、両タスクに対する認知に個々人で違いがあるなど個人固有性が示された。

OP-A3 府省等における SNS 運用方針の現状と課題

中央府省において情報発信手段として SNS の利用が一般的となっている。SNS の利用が一般的となるなかで、中央府省は SNS の運用方針を定めて公開している。本研究は、この SNS の運用方針に着目する。具体的には、中央府省を中心に国の 47 の機関について、SNS の運用方針の策定状況を確認する。このことによって、府省等の SNS の運用方針の現状と課題を論じる。

OP-A4 2D 平面内における自己回避型エージェントによる探索

ダイナミックフロアフィールド(DFF)モデルを利用し、自己回避（駆動）型エージェントのモデルを過去に提案をした。ここでは、このようなエージェントが、2D 上の格子点を探索する性能を報告する。自己回避型エージェントは、自己の存在した位置を回避するように非マルコフ的に移動を行う数理モデルであり、ランダムウォークエージェントとの比較することで、その性能を比較することができる。

OP-A5 擬死行動を取り入れた社会性クモ最適化アルゴリズムの提案

社会性クモ最適化（Social Spider Optimization: SSO）アルゴリズムは社会性クモの協力的行動から着想を得た群知能アルゴリズムである。SSO はクモの性別によって異なる手法で探索点を移動し、交配により新たな解候補の生成を行う。しかし、交配というメカニズムにおいて、局所解から抜け出す仕組みがないため、局所解に陥ることが考えられる。そこで本研究では、多数の局所解を持つ問題に対して、局所解に陥ることを防ぐために、SSO にクモの擬死行動を取り入れた社会性クモ最適化（SSO with Thanatosis strategy: SSO-T）アルゴリズムを提案し、その有効性を検証した。